伝記の方法を求めて
——『ルージンの防御』をめぐって

諫早勇一

ウラジーミル・ナボコフ（当時のペンネームで言えばシーリン）のロシア語で書かれた第三の小説『ルージンの防御』(Защита Лужина, 1929, 以下引用は, Ardis reprint, 1979 により，そのページを記す）が発表当時，多くの批評家から好意をもって迎えられたことはよく知られている[1]。ストゥルーヴェが「『ルージンの防御』は，シーリンが真に自己を発見した小説だと多かれ少なかれ一致して認められた」[2]と述べているように，多くの批評家はこの作品からナボコフ＝シーリンが小説家として成熟したと考え，賞讃を惜しまなかった。

だが，発表当時のこうした絶讃を念頭に置くとき，この作品が現在受けている扱いにはいささかとまどいを感じずにはおれない。シャホフスカヤのようにナボコフのロシア語小説を英語小説より高く置き，『ルージンの防御』，『賜物』，『死刑への招待』を「三大傑作」[3]と唱える人はむしろ例外で[4]，ナボコフについて論じる人の多くはこの作品を軽視あるいは無視している[5]。また，この作品に多少とも言及している論者も，Clancy のように多くの欠点を数えあげて作品を低くみる[6]人ばかりではないにしても，Johnson が「ナボコフの最もメカニスティックな作品の一つ」で「図式的」[7]と述べ，Field が「ナボコフのパターン化された小説の中で最も単純」[8]と述べているように，作品があまりに図式化されすぎていると感じているようだ。そして，もちろんこの作品がチェスのチャンピオンのルージンを主人公とし，作者自身が序で語っているように，作品構成そのものがチェスと深いつながりを持つ以上，図式化，パターン化という印象は避けられないものでもあるだろう。とは言え，この図式化，パターン化という言葉自体も本文に即してもっと検討される余地がありはしないか。本稿ではこの作品の初出のロシア語版（この作品は1964年に Scammell の協力をえて英訳される）から，そこに見られる頻出語をもとに，そのパターン化された作品構成の意味を問い直してみたい。だが，その前に作品のおおよその筋について触れておく必要があるだろう。

作品についてはナボコフ自身が自伝『記憶よ語れ』[9]の中で，「チェスのコンビネーションが彼の存在の実際のパターンを侵食して発狂するチェスのチャンピオンプレイヤー」[10]の話と要約しているので尽きていようが，もう少し細かく述べると，主人公のルージンは内向的な少年だったが，あるきっかけからチェスに興味を覚え，そこに驚くべき才能を発揮する。Wunderkind ルージンは亡命後プロのチェスプレイヤーとなり，多くのトーナメントで輝かしい戦績を残すが，次第に身体に変調をきたしてくる。彼は保養地で知り合ったロシア女性に求婚し，彼女の好意を得るが，宿敵 Turati との戦いの途中で倒れ，サナトリウムに入る。退院後，新妻をはじめ周囲の人々はチェス生活から遠ざけることで彼を回復させようと必死に努力するが，チェスの幻想にとらわれたルージンはやがて現実把握を失い，最後に窓から飛び降り自殺する。

では次に，この作品に関する従来の論を整理してみよう。まず，この作品について最もよく語られるのは，主人公ルージンの没頭するチェスと芸術とのかかわりだろう。既にホフロフ[11]，ホダセーヴィチ[12]，ウェイドレ[13]らの亡命批評家によってこのことが指摘されて以来，近年に至るまでこれは繰返し述べられている[14]が，実際作品中にもチェスを芸術(искусство)にたとえた言及がいくつも見出せる[15]ように，これは作者自身の意図ともかなり合致するに違いない。また，二つの世界，即ち現実の世界とチェスの世界（いわば非現実の世界）の均衡とその均衡崩壊の物語とする論[16]も，先に引用した作者自身の言葉から正当性が裏打ちできる。この他，英語で書かれた短編『サインとシンボル』(Signs and Symbols, 1948) に現われる語から，referential mania[17](現実の様々な現象の結びつきを過敏なまでに感じる人)としてのルージンについての論も少なくない[18]。細かい問題で言えば，ワレンチノフというルージンの元マネージャーの占める位置もナボコフ文学全体からは重要だろう[19]。

だが，もちろんこれらの問題は重要ではあるが，本稿では「伝記の方法」という別の観点からこの作品を眺めてみたい。と言うのも，これまで『ルージンの防御』と伝記についてはあまり論じられておらず，わずかに Moynahan がこの作品を imaginary biography のヴァリエーションの最初の作品と言及している[20]のが目を引く程度だからだ。これに対して，ナボコフ文学全体，とりわけ彼の英語小説に関しては，それが erfundene Biographien (fictitious biographies)[21]，fictional biography[22]，虚構の，想像上の伝記であることの指摘は決して珍しくない。とすれば，『ルージンの防御』をこうした虚構の伝記の先駆と見る試みも決して無駄ではあるまい。

伝記とは言うまでもなくある個人の生涯を，たいていは編年体でつづったものだが，例えば英語小説としての第一作『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』(1941) に典型的に見られるように，ナボコフはある虚構の人物の生涯をさまざまな方法によって再構成しようと試みる。もちろん，その意味ではある人物の生涯にわたるような比較的長い人生を扱う小説はたいてい伝記的と呼べることになるが，ナボコフの小説，具体的には『ルージンの防御』を伝記的と呼ぶ時，他の小説と最も区別されるのは作者の明確な目的意識ではなかろうか。例えば，この作品には「未来の伝記作家」という言葉が一度ならず現われる。

「父ルージン[23]は机にひじをもたせ，その机の上で青い学校のノート（きっと未来の伝記作家が大切にするだろう気紛れ）に連載小説を書いていた。」(40，傍点引用者，以下同じ)

「ルージン老人が長年暖めていた物語の筋はこの瞬間，たった今できあがったように思えた。そして彼は心の中で未来の伝記作家（逆説的だが，自分に時間的に近づくほどますます曖昧になり，隔絶されたものになる）を招いて，物語『初手』の誕生したこの偶然の部屋を注意深く眺めさせた。」(85)

こうした「未来の伝記作家」への言及は，登場人物の行動のレベルの上に存在する別の次元の眼の意識とも言えるが，同時に作者自身がこの作品と伝記とのつながりを読者に知らせるために送ったシグナルともとれるだろう。だが，『ルージンの防御』を伝記と呼ぶ時はるかに重要なのは，冒頭と結尾の部分ではなかろうか。作品は奇妙な出だしに始まる。

「何よりも彼をびっくりさせたのは，月曜から自分がルージンになることだった。」(23)

そして，作品の結尾もいささか風変わりだ。

「ドアが打ち破られた。『アレクサンドル・イワーノヴィチ，アレクサンドル・イワーノヴィチ！』といくつもの声が叫び始めた。
しかし，いかなるアレクサンドル・イワーノヴィチもいなかった。」(267)

主人公の姓がルージンであることは最初から告げられているが，彼の名と父称がアレクサンドル・イワーノヴィチであることはこの結尾まで触れられることがない。つまり，この作品はルージンという姓の誕生に始まり，アレクサンドル・イワーノヴィチという名と父称の誕生と消滅に終わる。と言っても，このことは即ち主人公の誕生から始まって死で終わることを意味するのではない。結尾は確かに死を暗示しているが[24]，作品の冒頭は主人公が学校に通い始めると，そこで自分がルージンと呼ばれることを知って驚くことを述べているのだから，ルージンの学校入学を表わしているに過ぎない。しかし，ここで重要なのはこうした実質的意味ではなく，名前の誕生と消滅という枠組ではなかろうか。
ところが，アレクサンドル・イワーノヴィチという名と父称が結尾で初めて語られることに触れる論者は少なくない[25]のに，この枠組について論じた人はきわめて少ない。そして，その例外的存在である Lee はこう語る。

「この小説のテーマと構成は冒頭と結尾の部分に含まれている。冒頭で若い少年は自分が今やルージンになることを発見するが，まだ自分がルージンでないことも知っている。彼の名と父称がアレクサンドル・イワーノヴィチだったこと，そして彼を含めて誰もそれを使わなかったことを知る結尾で，われわれは彼が何ら実在せず，物語は実在を求める彼の探求——それは絶対的な必然からの逃避だったが——であることを知る。」[26]

だが，Lee の言うようにこの枠組はルージンが実在しなかったことを表わすのだろうか。いや，むしろこの枠組は実人生をふちどる枠組と見るべきではなかろうか。ナボコフはその自伝（以下，前述の『記憶よ語れ』のロシア語版『他の岸辺』から訳出する）の冒頭でこう語る。

「深淵の上で揺籃が揺れる。霊感にみちた迷信のささやきをかき消して，常識は，人生は二つの理想的なまでに暗い永遠の間の弱い光の裂け目にすぎないとわれわれに教える。」[27]

この二つの暗い永遠とはもちろん誕生前の世界と死後の世界を指す。つまり，われわれの人生とは誕生前の長い闇と死後の長い闇にはさまれた短い光の裂け目だとナボコフは説く。とすれば，『ルージンの防御』の冒頭における姓の誕生（名前のない状態から名前を持つに至ることは，やはり一種の誕生だろう）と結尾における名と父称の消滅は，この二つの闇の終わりと始まりを表わすに違いない。そして，その闇にはさまれた物語全体は，決して主人公が実在しなかったことを表わすのではなく，むしろ文字通り主人公がいかに生きたかを示

すと考えるべきだろう。結局，この作品の奇妙な冒頭と結尾は，作品が伝記という明確な目的意識の下に書かれたことを表わすものと考えたい。

次に，もしこの作品が一種の伝記として構想されたとしたら，そこでナボコフはどのような独特の伝記を書こうとしたのだろうか。そして，この問題は作者の伝記の方法意識と密接につながっている。

まず，すぐに気づくことは，いわゆる伝記特有な編年体の棄却だろう。『ルージンの防御』は少なくとも主人公の生涯を時代を追って叙述した物語ではない。そこで時間の流れは，時に一瞬にして16年飛躍し，時に逆行する。従って，この意味でこの作品はナボコフの自伝と深く結びついている。更に，ナボコフはその自伝の序（ロシア語版への序）の中でこうも述べる。

「この本の目的は，過去をできる限り正確に記述し，そこに完全に意味のある輪郭を探すこと，即ち明白な運命の中のひそかなテーマの発展と繰返しを探すことである。私はムネモシュネに自由だけでなく，法則を与えようと試みた。」[28]

つまり，伝記（自伝）とはまた人の生涯に潜むひそかなテーマの発展と繰返しを探し求めることでもある。要するに，ナボコフの伝記の方法意識とは大きく言ってこの二点，編年体の棄却と，ひそかなテーマの発見に要約でき，このことは『ルージンの防御』に限らずあてはまる。だが，とくに『ルージンの防御』に話をしぼる時注目されるのは，こうしたナボコフの伝記の方法がチェスのモチーフと結びつけて論じられていることだろう。例えば，16年の飛躍について作者は序の中でこう語る。

「しかし，私のはめこんだチェスのイメージは個々の場面だけに見られるのではなく，その環の結びつきはこの好感を与える小説の根本構造にも見てとれる。こうして，4章の終わり近くで私は盤の隅で意外な手を打ち，一行のちには16年が経過する。」(18)[29]

また，ひそかなテーマの発展と繰返しという点に関しては，本文中の次の個所がしばしば引用される。

「ちょうど実際のゲームで，理論的に知られた詰めチェスの何かのコンビネーションが盤上にかすかに繰返されると同じように，彼の現在の生活の中で，彼の知る図式の一貫した繰返しが形づくられていた。」(225)[30]

このようにこの作品にあって伝記の方法意識はチェスと分かち難く結びついている。ただ，とくに近年こうした作品の構成とチェスとの密接な結びつきにいくらか疑問が投げられ始めたことは一言しておかねばならない。例えば，Clancy は一瞬の間の時間の変化はチェス的というよりはむしろよくある小説技法の一つだと述べている[31]し，Johnson は細かい具体的検証から，ナボコフが小説の序で述べている詰めチェスの課題が作品とほとんど関係を持たないことを指摘した[32]。つまり，作者自身の序の解説は多分に人を欺くもの（実際に作品に出てこない記述があたかも作品に出ているかのように装われる[33]）であり，それを鵜呑みに

してはならないことが警告され始めたのだ。だが，もちろんこのこと自身は重要に違いないが，それでもなおこの作品の方法とチェスとの結びつきを完全に否定することはできない。そこで，本稿では ход（英訳では多く move と訳されている）という語を手がかりに，作品の方法とチェスとのかかわりを再検討してみたい。

まず，題名の『ルージンの防御』とは何だろうか。多くの論者が一致して語るように，それは一つにはチェスの好敵手 Turati の戦法に対する防御であるが，同時に後半部でルージンが感じる実人生における定かならぬ脅威に対する防御でもある。では，それは具体的には何に対する防御なのか。論者の多くは pattern, combination という語でそれを説明しようとしているが，この pattern, combination とは即ち ход のおりなす pattern（ロシア語では узор），combination であることを見落してはならない。ルージンはひそかな敵の次の手（следующий ход, 239）を考え，その不意の手（неожиданный ход, 255），容赦ない手（неумолимый ход, 258）に対して防御策を講じる。彼の恐れるものが宿命的なコンビネーション（роковая комбинация, 239）であるにしても，その基本単位はあくまで ход に他ならない。そして，この ход はここで仮に「手」と訳したが，チェスを離れて言えば，歩みでもあり流れでもある。つまり，この語はチェスの一手を示すと同時に物語の流れ，時間の流れをも表わす幅広い語なのだ。そして，ついでに言えば，ход は英訳の move より広い意味にこの作品では用いられている。一例をひこう。第4章で父の愛人である叔母の家でルージンがとある老人からチェスの手ほどきを受けている時，当の叔母は "ушла черным ходом"（64）する（裏口から出て行く）。この черный（黒い）をチェスの黒と結びつけることは難しくないし，ход も既に述べたようにチェスと密接に結びついた語だ。しかし，英訳には "left by the back door"[34] とあるだけで，ロシア語のもつチェスとの連想は失われている。従って，ここでは専らロシア語の ход を中心に論を進めて行きたい。

まず，ход は作者自身の序にも頻出する（ただし，このロシア語の序は英訳の序のロシア語訳なので，正確に言えばこの ход は move の訳語にあたる）。

① 「今この小説を読み返し，またその筋（プロット）の歩み（ход）を楽しみながら……」（16）
② 「……それともいらいらさせるほど非対称のパターン，そこでは3つの道化師のように多彩な色彩がナイトの動き（ход коня）のようにジグザグに……」（17）
③ 「こうして，4章の終わり近くで私は盤の隅で意外な手（непредвиденный ход）を打ち……」（18）
④ 「この3つの中心的な章における動きの一貫したつながり（последовательный ряд ходов）は詰めチェスの有名な型を思いおこさせる，もしくは思いおこさせるに違いない。そこで問題なのは，何手かで（во столько-то ходов）詰めを見つけることではなく……」（18）

これらの引用からすぐにわかるように，ход は一義的には「手」，駒の動きを表わすが，ここではそれが意識的に筋（プロット）の展開と重ねあわされている。例えば，④の最初の ход は明らかに筋の動きを意味しているのに，それが途中でチェスの概念に転じられ，後の ход に見るように「手」という完全にチェスの用語に変わっている。①でも разыгрывая ходы его фабулы（replaying the moves of its plot[35]）という部分は，筋の動きを示しながらも，

разыгрывая (replaying) が冠せられることによって，チェスのゲームと結びつけられている。つまり，ход (move) という語はチェスというゲームと筋の展開を直接に結びつける機能を持っているのだ。

次に，本文中に出てくる move と訳されている ход を見てみよう。この語は主人公が初めて音楽家からチェスというゲームの存在を知らされる部分（「何というゲーム，何というゲームだ。コンビネーションはまるでメロディーのよう。全く私はただ動き（ходы）を聞くこともできる」，51）にも現われるように，初めは直接にチェスと結びついた例が多い。「ナイトの動きのように」(ходом коня, 109)，「7手目に」(на седьмом ходу, 126)，「強力な手」(сильный ход, 131)，「おとなしい手」(тихий ход, 131) 等々にもそれは見られる。しかし，既に指摘したように後半部に入ると，直接チェスのゲームに結びつくよりも，ルージンの幻想に現われる実生活をおびやかすチェスの手というイメージが圧倒的になる。

「一つのことを彼ははっきりと感じていた。こんなにも長い間，動きの狡猾な結合に (хитрого сочетания ходов) 気づかなかったことに，多少の無念さを感じていた。」(225)

「今や彼はもっと用心深くなって，動きの今後の展開を (за дальнейшим развитием ходов) 見守ろうと決意した。」(225)

「今ではこれらがみなコンビネーションをなし，幼年時代に定着した動きの巧妙な繰返し (замысловатым повторением зафиксированных в детстве ходов) だったことを知って……」(227)

「たった今彼の人生に，宿命的なコンビネーションを容赦なく続ける微妙な一手(тонкий ход) が打たれた……」(239)

「どこかに次の手 (следующий ход) のほのめかしでもうかがえはしないかと……」(239)

「巨大なコンビネーションの中の新しい一手 (новый ход) を見逃しはしないかと恐れて……」(246)

「ルージンは念入りに，できる限り冷静に，彼に対してもう打たれた手 (сделанные против него ходы) を点検した。」(246)

「巧妙にある謎のテーマを繰返す全体のコンビネーションの中の一連の動き (серией ходов) だった。」(253)

「しかし，次の手 (следующий ход) は非常にゆっくりと用意された。」(253)

「こうして敵の考え出した手の今後の結合を (дальнейшее сочетание ходов) ごちゃごちゃにしようと……」(254)

「鍵は見つかった。攻撃の目的は明白だ。それは動きの仮借ない繰返しで (неумолимым повторением ходов)，人生の夢を打ちくだくあの情熱へと再び導くのだ。」(258)

「彼の防御は間違いだった。敵はこの間違いを予見していて，前から用意されていた容赦ない手 (неумолимый ход) が今打たれた。」(258)

たくさん引用したが，ここからも物語のクライマックスが形成されていく過程，ルージンのはかない防御を打ちくだく敵の手の脅威が次第に増して行く過程がうかがえるだろう。ход とはチェスの一手であるとともに，とどめようもなく押し寄せてくる継続的な歩みでも

ある。とすれば，これは時間の比喩でもあるまいか。

残念ながら本文中には時間の ход といった句は見出せない。しかし，後半のクライマックス部分で時間が幾度か触れられていることも確かだ。13章で敵の ход のおりなすコンビネーションに何とか防御策を考え出したいと願うルージンは，「きっと繰返しが続くだろうとの思いがあまりに恐ろしかったので，生活の時間を止めたい」(225-226) と願う。時間を止めること，それは敵の ход に対する最善の防御策ではないだろうか。また，最後の14章では，「このゆっくりした念入りな攻撃を前にして，おのれの無力をことさら強く感じ」て，「この夜，この静かな夜をできる限り長びかせ，真夜中で時間を止めたい」と思った夜，突然時計のチクタクいう音がとぎれる。そして，彼は思う。「夜は永遠に凍りつき」，「時間は死に絶えた」(247) と。しかし，それは巻き忘れた時計が止まっただけのことだった。翌朝また時はいつものように流れて行く。それ故，こうした記述からこの ход が時の流れと密接に結びついていることは疑いあるまい。

では次に，英語で move と訳されていない ход を見てみよう。例えば，第5章には「一般的な考えによれば，それ（ロシア革命——引用者注）はあらゆるロシア人の生活の流れ（ход жизни）に影響を及ぼした」(88) とあるが，この部分は英訳では the course of every Russian's life[36] となっている。つまり，ход は筋の流れであると共に，生活の流れ，時間の流れでもある。では，その流れは押し止められないのか，後戻りさせられないのか。確かに主人公ルージンはその流れを止められなかった。しかし，物語の作者なら，伝記作家ならそれはたやすいことだ。主人公の父の作家ルージンはこんな物語を構想する。

「彼は考えを逆行（обратным ходом）させようとした——この感動的な，実に明瞭な死から，主人公の霧のような誕生へと後戻りさせようとしたが……」(86)

この個所は英訳では backwards[37] と訳されているが，父ルージンの構想は作家なら，登場人物を操る作家なら容易に可能だ。つまり，この作品の大きなポイントは，登場人物にとって止めることも逆行させることもできない ход と，作者にとっては容易に逆行可能な ход の対照にあるのではなかろうか。そして，この小説のユニークさは，チェスというゲームの用語でもある ход の意味を巧みに変じることによってそれを表現しているところにあると思われる。先に述べた作者の伝記の方法意識に立ち戻るなら，小説の方法はチェスの駒の動きと直接にかかわってはいない[38]が，ход という語を用いてチェスと小説の方法は分かち難く結びついていると考えたい。

なお，これまで述べてきたのは専ら編年体の棄却，即ち小説における時間の可逆性についてで，人の生涯に潜むひそかなテーマの発展と繰返しの発見という方法については触れてこなかった。それは一つにはこのことが既に多くの批評家から指摘されてきたことによる。例えば，Field は叔母とのチェスの試合に出てくる「突然，むき出しの孤立無援の王（キング）が飛び出た」(63) との記述が，最後のルージンの投身自殺と結びついていると述べている[39]し，Johnson は Turati との試合の後の帰還と少年時代の鉄道の駅からの逃走，黒ヒゲの精神科医と幼いルージンを連れ戻す黒ヒゲの農夫，小さな子を連れたソビエト女性とルージンを連れた叔母等々がパラレルをなすと指摘している[40]。また，Rowe は少年時代のあだ名 Tony（ロシア語版ではアントーシャ）が12章で再び繰返されることの他，犬，パンくず，最後の

晩さんなどのモチーフの繰返しを説いた[41]。そして，こうした the doubling of time[42]（時間のダブらせ）がこの作品においても重要な方法的意味を持つことは言をまたない。自伝の中でナボコフはこう語っている。

「言わせてもらえば，私は時間のはかなさ，軽快で淀みないペルシアの時間のはかなさを信じない。私はこの魔法のじゅうたんを，一つの模様が他の模様に重なるように折り重ねることを覚えた。」[43]

時間の模様を重ねること，これは即ち時間の中に繰返されるパターンを見出すことに他ならない。このことはここでほのめかされるように，常に時間の呪縛からの解放をめざし，永遠性を志向したナボコフ文学の大きなテーマにつながる。しかし，ここでは再び話を時間の可逆性に戻さなければならない。

先に伝記における時間の逆行は登場人物を操る伝記作家にとっては容易だと述べた。では，このことは登場人物には全く不可能なのだろうか。確かにルージンは時間の歩みに抗することができないままに破滅した。だが，ナボコフ文学全体から言えば，時間の逆行は記憶という手段によって登場人物にも可能になる。序で作者は「第4章から始まる過去への帰還のテーマ（тема возвращения в прошлое）」（18）について語っているが，これは作品構成だけを指すのではない。「過去への帰還」といった時間概念をいわば空間的な旅の概念で置きかえた言葉は，記憶を表わすのにナボコフが好んで用いている[44]のだから。

この作品でも，10章でサナトリウムに入ったルージンの意識は過去，おのれの幼年時代のロシアをさまよい，ついに「長い旅からまい戻」（171）る。また，意識回復後も彼の思いは常に彼の幼年時代へと「帰った」（174）。彼を案じる妻も14章で「長い悠然たる旅」に出て，「ルージンの過去」（251）へと向かった。つまり，登場人物もまた記憶によって過去にまい戻る，即ち時間を逆行させることができる。そして，この記憶の働きはその後のナボコフの小説にあっては，はるかに大きな意味を持ってくる。ところが，結局『ルージンの防御』にあって記憶は，ときたま現われる未来の予感（例えば，駅から逃げた幼いルージンを連れ戻す黒ヒゲの農夫は，「未来の悪夢の住人」（32）を呼ばれる）同様，伝記の方法の枠内でのジグザグを構成している[45]に過ぎない。いわば主人公は伝記の方法の枠内で時間に囚われたまま滅びる運命にある。そして，時間のダブらせもまたこの作品にあっては永遠性を志向してはいない。すべてが二つの永遠の間にはさまれた「弱い光の裂け目」の中に閉じこめられたままだ。

結局，『ルージンの防御』ではこの完結した時空間を描くのが伝記の方法だったのではなかろうか。そこで伝記の方法は物語を拡散より収斂へと向けた。物語のパターン化，図式化が多くの論者にとって欠点と映るのは，幾分かはこのためだろう。伝記の方法が作品を未来に向かって開かせるには，おそらく『賜物』（1937—38）まで待たねばなるまい。

註

1）例えば，拙稿「ロシア亡命批評家とナボコフ」，「ロシア「亡命」文学の研究」，1979，pp. 8–11参照。

2）Струве, Г. Русская литература в изгнании. Опыт исторического обзора зарубежной

литературы, New York, 1956, стр. 280.

3) Шаховская, З. В поисках Набокова, Paris, 1979, стр. 131.

4) 他にストゥルーヴェもこの作品を「ナボコフの最良のロシア語小説の一つ」と述べている。 *cf.* Struve, G. Notes on Nabokov as a Russian Writer, In Dembo, L. (ed.) Nabokov : The Man and His Work, Madison, 1967, p. 53.

5) ナボコフのロシア語小説全般を扱った Majhanovich もなぜかこの小説には独立した項目を設けていない。*cf.* Majhanovich, L. The Early Prose of Vladimir Nabokov-Sirin, (University of Illinois, 1976, unpublished Ph. D. Thesis).

6) *cf.* Clancy, L. The Novels of Vladimir Nabokov, London, 1984, pp. 34–41.

7) Johnson, D.B. Worlds in Regression : Some Novels of Vladimir Nabokov, Ann Arbor, 1985, p. 83.

8) Field, A. Nabokov : His Life in Art, Boston, 1967, p. 176.

9) ナボコフ自身の自伝は英語版 "Conclusive Evidence" (1951), ロシア語版 "Другие берега" (1954), 英語版 "Speak, Memory" (1966) と複雑な変遷をたどるが，以下の部分は1954年版にも1966年版にもない。邦訳『ナボコフ自伝』大津栄一郎訳，晶文社，1979の解説に触れられた "Speak, Memory : A Memoir" (1960) にあるらしいが未見なので訳は Dembo の引用に拠った。

10) Dembo, L. S. Vladimir Nabokov, an Introduction, In Dembo *op. cit.*, p. 6.

11) см. Новик, А. В. Сирин : Защита Лужина, Современные записки 45, 1931, стр. 514. なお，ノヴィクはホフロフのペンネーム。

12) см. Ходасевич, В. О Сирине. В кн. Литературные статьи и воспоминания, New York, 1954, стр. 253. なお，この論文の初出は1937年。

13) *cf.* Vladimir Weidle on Sirin, In Field, A. (ed.) The Complection of Russian Literature, Pelican, 1973, p. 239. なお，初出は1936年，"Круг" 誌上。

14) *cf.* Field *op. cit.*, p. 175. Hyde, G. M. Vladimir Nabokov: America's Russian Novelist, London, 1977, p. 83. Johnson *op. cit.*, p. 91.

15) Защита Лужина, стр. 71, 97, 100, 139.

16) *cf.* Tiedeken, R. Memory and Pattern as Thematic Idea and Structural Principle in the Autobiographical and Selected Fictional Prose of Vladimir Nabokov, (Cornell university, 1977, unpublished Ph. D. Thesis), p. 107.

17) Nabokov, V. Nabokov's Dozen, Nash, 1971, p. 69.

18) *cf.* Rowe, W. W. Nabokov's Deceptive World, New York, 1971, p. 81. Carroll, W. Nabokov's Signs and Symbols, In Proffer, C.R. (ed.) A Book of Things about Vladimir Nabokov, Ann Arbor, 1974, p. 209. Andrews, L.R. Deciphering "Signs and Symbols," In Rivers, J. E. and Nicol, C. (ed.) Nabokov's Fifth Arc, Austin, 1982, p. 145.

19) см. Шаховская, указ. кн. стр. 148.

20) *cf.* Moynahan, J. Vladimir Nabokov, Minneapolis, 1971, p. 19.

21) *cf.* Grabes, H. Erfundene Biographien : Vladimir Nabokovs englische Romane, Tübingen, 1975, S.x. なお，この本の英訳の題名は "Fictitious Biographies : Vladimir Nabokov's English Novels" (The Hague, 1977).

22) *cf.* O'Connor, K. T. Nabokov's *The Real Life of Sebastian Knight* : in Pursuit of a Biography, In Baer, J.T. and Ingham, N.W. (ed.) Mnemozina : Studia litteraria russica honorem Vsevolod Setchkarev, München, 1974, p. 281.

23) ルージンの父は子供向けの物語作家。

24) ルージンは死んでいないとの異論もある。*cf.* Lilly, M. Nabokov : Homo Ludens, In Quennell, P. (ed.) Vladimir Nabokov : a Tribute, London, 1979, p. 93.

25) *cf.* Field *op. cit.*, p. 178. Clancy *op. cit.*, p. 38.

26) Lee, L.L. Vladimir Nabokov, Boston, 1976, p. 50.

27) Набоков, В. Другие берега, Ann Arbor, 1978 (Reprint of the 1954 ed.), стр. 9.

28) Там же, стр. 7.

29) Ardis のリプリントは本文が23ページから始まる。ロシア語版への序はリプリントの際につけ加えられた英語版への序のロシア語訳で，ここにはページ数はない。ここでは便宜的に本文から遡ってページ数を定めた。

30) 本文の143—144ページにもほぼ同じ記述がある。

31) *cf.* Clancy *op. cit.*, p. 35.

32) *cf.* Johnson *op. cit.*, p. 87.

33) Ibid., p. 88.

34) Nabokov, V. The Defense, New York, 1970, p. 56.

35) Ibid., p. 8.

36) Ibid., p. 80.

37) Ibid., p. 78.

38) 直接的結びつきを見る論者もいる。*cf.* Lilly *op. cit.*, p. 92.

39) Field *op. cit.*, p. 178.

40) Johnson *op. cit.*, p. 85.

41) *cf.* Rowe, W.W. Nabokov & Others : Patterns in Russian Literature, Ann Arbor, 1979, pp. 105–107.

42) Roth, P.A. Lunatics, Lovers, and a Poet : a Study of Doubling and the Doppelgänger in the Novels of Nabokov, (The University of Conneticut, 1972, unpublished Ph. D. Thesis), p. 111.

43) Другие берега, стр. 128.

44) このことについては拙稿「ロシアの奪還——『賜物』からの出発」，「ロシア文学論集」創刊号，1977年参照。

45) Clancy はこの作品における突然の時制の変化を恣意的と言って非難している。*cf.* Clancy *op. cit.*, p. 39.